

令和 6 (2024) 年 度
一般選抜前期日程 試験問題
人間健康科学部 看護学科

小論文

注 意 事 項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないでください。
- 2 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 3 解答には鉛筆かシャープペンシルを使用してください。
- 4 問題は全部で 6 ページ、解答用紙は全部で 2 枚あります。
- 5 試験時間は 9 0 分です。
- 6 試験終了後、問題冊子も回収します。
- 7 何か伝えたいことがあるときは挙手してください。

第1問

以下の課題文を読んで、設問に答えなさい。

僕は24時間、365日介助が必要な重度の身体障がいがあります。そのため、パソコンやスマホの操作をするときなども、常に介助者の手を借りなければなりません。日常生活すべてが「全介助」である障がい者にとって、介助者とは非常に大きく重要な存在です。彼らは単なる日常生活の支援者ではなく、当事者が社会参加し、夢を追求しながら生きていくための支援者でもあるからです。

当事者と介助者に、上下関係はありません。当事者は自分の人生を支えてもらえるよう、一生懸命、介助者を育てます。長期的にかかわってくれる、よりよい介助者に囲まれることで、当事者みずからの人生はいつそう充実したものになります。また、責任を持って自分の手で人を育てるということは、受け身であった障がい者が主体的に動き出すきっかけとなり、それは大きなやりがいにも繋がるのです。

(中略)

研究者でありCIL*の介助者でもある前田拓也氏が述べている通り、身体介助はある程度固定化されたルーティン作業と言えますが、自分の生活に必要な介助内容を介助者に伝え、実行させ、覚えさせ、ルーティン化させるまでに相当な労力がかかります。

さらに言えば、コミュニケーション介助に関してはルーティン化が困難であり、僕の介助者には、僕の発する短い言葉から、僕の考えや思いを一通り汲み取ることのできるスキルが求められます。

もちろん、これは容易なことではありません。信頼できる介助者とともに時間を過ごし、少しずつ考えの共有をしていく。自分の考えや思いを、一字一字紡いで介助者に伝えていき、わかってもらう。それは、互いの思いやりと忍耐が最も試される時間です。

しかし、その積み重ねによって、介助者は僕の思いをだんだんと的確に読み取ってくれるようになります。この二人三脚があれば、僕のように発話が困難な障がいがあっても、社会から孤立せずに自分らしさを失わず生きていくことが可能になるのでは、と思っています。

ここからは、より具体的な介助関係の話をしたしたいと思います。(中略)「介助者手足論」とは、障がい者と介助者の関係性について、障がい者運動のなかで、最も一般的に浸透している考え方です。

(中略)

イメージしやすいよう、介助者手足論を僕の生活の一場面に当てはめてみます。

たとえば、僕がカレーを食べるとします。僕の場合は一人で食事の準備や食べることができないので、介助者をお願いして、僕が食べやすいように食材をハサミで刻み、机にもってくるという食事の用意から、口に運び、咀嚼するまでを介助してもらい、食事をします。従来の介助者手足論に従うと、介助者は、「大輔さん、福神漬けから食べますか？ それともカレーを食べますか？」「ご飯を食べますか？ ルーを食べますか？ ひとさじの量はどれ

くらいですか？」というように細かく聞いてくるかもしれません。さらには「ルーの具にはにんじん、じゃがいも、たまねぎが入っていますが、どれを食べますか？」と聞く介助者もいるかもしれません。スプーンに載せる料や食材の種類まで細かく聞くのは従来の、すべて障がい者の指示がないと介助者が動かない介助者手足論の思想になります。事例はやや極端ではありますが、完全に手足に徹する介助者とはこういうものです。

僕の場合、生活をしていくうえで食事以外にもやりたいことがたくさんあります。そのため、食事だけに多くの時間を割けません。先の例のように当事者の自己決定のみでは時間がかかってしまうだけでなく、一日の限られた時間も奪われてしまいます。このようなことを避けるためには、介助者と当事者が時間をかけて互いのことを知り、約束事やパターンを築いていく必要があるのです。食事の場合でいえば僕の好みや、ふだん口に運ぶ量を知っておくことで、毎回指示を出さなくとも、スムーズに食事をすることができます。それは暗黙の了解ごととなり、100%の理想とはいかなくとも、時間を短縮し、食べたいものが食べられるような「ある程度理想」の食事ができるようになりますと言えます。

食事の場面だけでなく、生活のあらゆる場面で、僕はこうした介助が必要となります。これは僕と介助者がともに過ごす時間を積み重ねていくなかで、少しずつ理解していくものであり、その理解のうえで、ある程度“勝手に”動いてくれる介助者の存在は、僕がやりたいことをやるためには絶対的に必要でした。長い時間をかけて、僕の考えを共有してきた介助者には、日常生活場面以外のこともある程度おまかせできます。

介助者手足論のように、1から100まですべてに指示を出し、介助者に黒衣に徹するようにさせていたとしたら……僕はおそらく、今のようにやりたいことを実現させたり夢を追求することはできなかったことでしょう。だから僕は、「ともに創り上げていく」という介助者との関係性にプラスの価値を置いています。

出典：天畠大輔「＜弱さ＞を＜強み＞に一突然複数の障がいをもった僕ができること」pp.122-128, 岩波新書（新赤版），2021年10月，株式会社岩波書店、（一部改変）

（注）出典内での書籍等の引用における「障害者」の表記はそのまま使用した。

* CIL（Center for Independent Living：自立生活センター）1970年代初頭に米国カリフォルニアバークレーに自立生活運動の拠点として生まれた当事者主体のサービス機関。

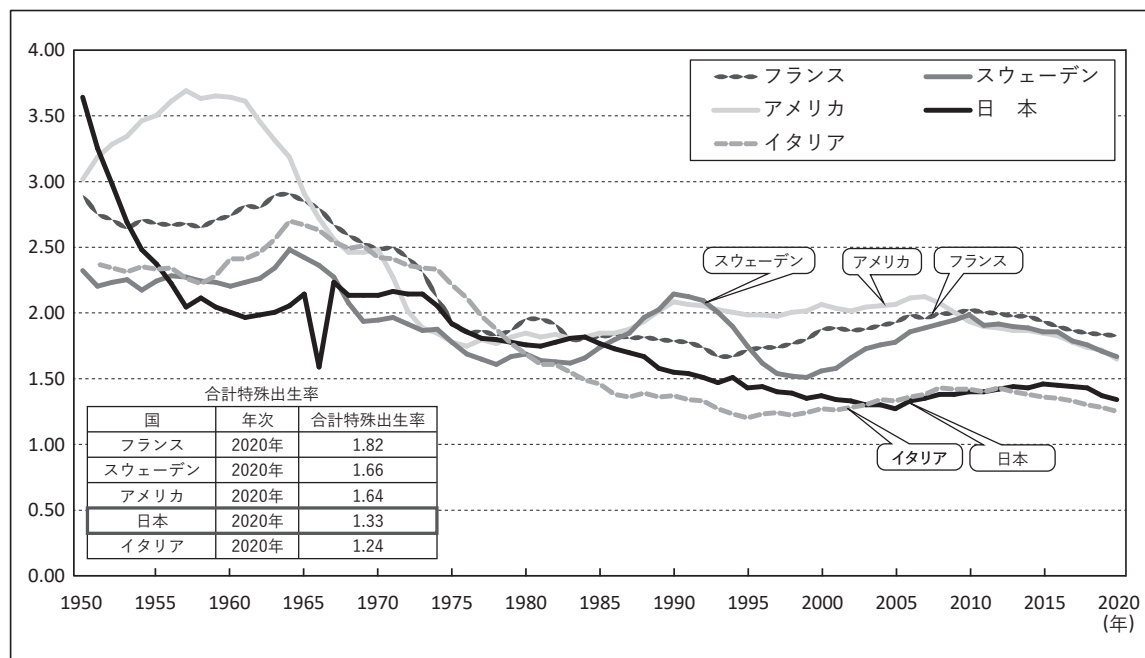
設問 課題文を踏まえて、全介助が必要な障がい者と介助者は、どのような関係性をつくっていく必要があるか、あなたの考えを 600 字以内で述べなさい。

このページは白紙です。

第2問

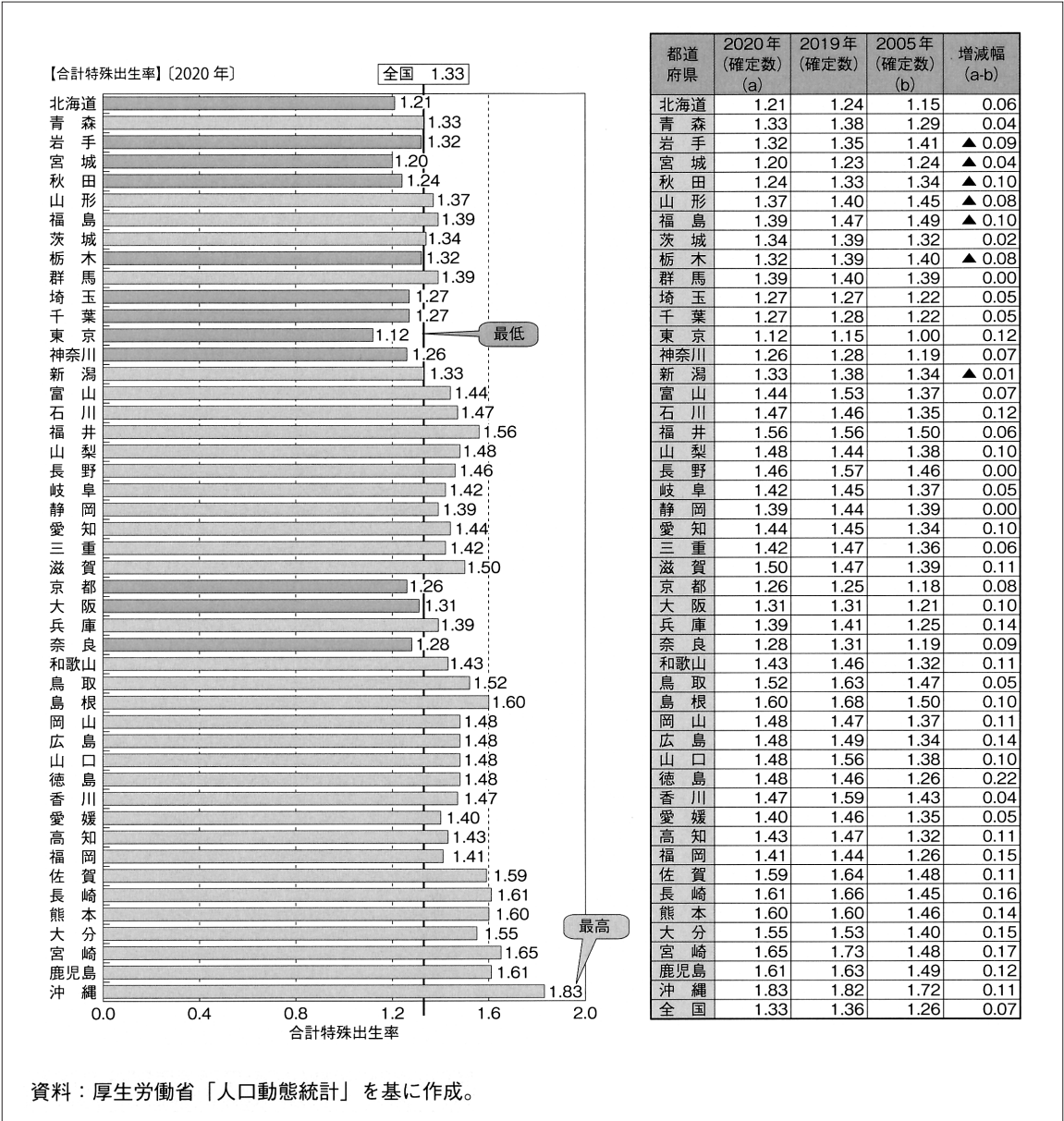
次の資料をもとに、下記の設問1、設問2に答えなさい。

図1. 諸外国の合計特殊出生率の動き（欧米）



【出典】 内閣府 令和4年版 少子化社会対策白書より一部改変

表 1. 都道府県別合計特殊出生率



【出典】内閣府 令和 4 年版 少子化社会対策白書

設問 1 図 1 は、諸外国の合計特殊出生率の国際比較（欧米）である。この図から読み取れることを 3 つ述べなさい。

※合計特殊出生率：「15 歳から 49 歳までの女性の年齢別出生率を合計したもの」で、一人の女性が一生の間に生むとしたときの子どもの数に相当する

設問 2 図 1 及び表 1 の都道府県別合計特殊出生率を参考にし、今後日本がどのような地域社会を形成していくと良いか、あなたの考えを 500 字以内で述べなさい。